

第10回東京藝術大学特別講義（DOOR）受講感想【一部】

天草市立本渡看護専門学校

2年生 令和6年2月22日（木）3限目、4限目

1年生 令和6年2月27日（火）1限目、2限目

演題	ここに居ない人について考える～孤独・孤立課題の当事者尊重～
講師	渡辺 篤（わたなべあつし）氏 現代美術家、社会活動家 2009年、東京芸術大学大学院修了（美術研究科油画専攻） 近年は、自身も経験者である「ひきこもり」にまつわる関係性の課題や、共感可能性と不可能性・社会包摂の在り方などをテーマとしている。2018年から「アィムヒアプロジェクト」を主宰し、孤独・孤立当事者たちとの協働企画を多数実施。（その他別紙プロフィール参照）

2年 ①

今回の講義を聞いて、実際に引きこもりの経験がある渡辺さんの作品とその背景を知ること、引きこもりの現状や社会復帰につなげるための方法について学ぶことができた。渡辺さんは、3年間の引きこもりを経験されたあと、社会復帰をするうえで、自分の中でこの経験を「負の意味でとらえたくない」「価値あるものに昇華」したいと作品として表現する美術家として社会復帰した。私は継ぎされた引きこもりをやめた日の自撮りの作品や復されたドアの作品が印象に残っている。また、引きこもりの方々と関わり共同作品として、自室の写真を展示した作品も印象的だ。それらの作品は、なぜ部屋に閉じこもっているのか考え、どのように傷ついたのかがくみ取れる。日本は146万人以上の引きこもりがいるようだ。

孤立した先にどう居場所を作るのかが大きな課題となっている。渡辺さんは、作品を作るうえで、強制ではなく自分から参加してもらうようにしている。それこそが“孤立した先の居場所”となっているのではないかと思う。社会的生きづらさを感じている人に寄り添えるような関わり方を私も学んでいきたいと思った。

2年 ②

日本には引きこもっている人が146万人いることに驚いた。引きこもりの経験がある人が、引きこもっている人に寄り添い支援することで、より当事者のことを理解でき、その人に合った支援ができると考える。フリーハグの際、その場にいけない人もいたため、渡辺さん本人が当事者のところまで行き、当事者の話を聞いてからフリーハグを行うという行動をしていることを知り、そんなこともできるのかと、新しいことを知ることができた。また、フリーハグの際は、医療や福祉経験のあるスタッフも同行していることを知り、興味がわいた。

看護師と働き始めて余裕ができれば、スタッフをやってみようかなと思った。引きこもりの人には無理やり引きずり出すような暴力的なやり方ではなく、寄り添う

こと、支援の際には、対話をし、安心して話せる場を作ることが大切であることが分かった。

2年 ③

今日の講義を聞いて、相手を知るためにたくさん質問するのではなく、自分のことについて相手に伝えることが大切であると考えた。また、アートと看護との共通点として、自分の考え方や価値観を押し付けず、相手のニーズに応じた支援を行っていくことだと思った。ニュースやテレビ番組で引きこもりの方の部屋を映し出すところは見たことあったが、無理矢理社会に出し、引きこもりをやめさせる行為は暴力であり、当事者の存在自体を否定することだと分かり、引き出し屋の背景は暴力団などだということに驚いた。“普通”という概念を押し付けず、まずは自分の特性について考えていきたい。

1年 ①

私にとって引きこもりは根強い社会問題のひとつであり、無理強いをしてでも社会復帰させる必要があるものという認識だった。無理矢理に引きずり出す形をとらないと引きこもりは中々やめられないもの、そして辞めさせるべきものと考えていた。しかし、渡辺さんは引きこもりをただマイナスなものとして捉えるのではなく、「その人にとって必要な時間」と捉え、アートとして価値あるものに昇華して、決してネガティブなイメージだけに留まるものではない引きこもりの実情を広く世に伝えようとされていて、とても素晴らしいなと思った。この講義で知った「引きこもり」の時間の価値や人生における必要性を大切に胸に刻んでいきたい。

1年 ②

今回の講義で、引きこもりの方や、強い精神的ショックを受けている方の考えを知るためにどうすればいいのか疑問を抱いた。私は考えを知るためには、コミュニケーションを取り、対話が必要だと考えたが、引きこもりの方やショックを受けている方たちは話したくない、外に出たくない、1人でいたい、という気持ちが強いので、コミュニケーションをとるのが困難だと思った。講師は安心できる場をつくることが重要であると言っていたが、その場をどのように作るのか、作ってどのように集めるのか、その場に行くことで心が安心した人はどの位いるのか気になった。

1年 ③

今回の講義を聞いて「Nothing about us,without us」という言葉が印象に残りました。現代インターネットやゲームなどが進化し、ひきこもる若者が増えてきていると思います。これから生きていく中で、引きこもりの方と関わる日が来ると思うので、その時は無理矢理やめさせようとしたりせず、相手が話してきた時の時

間を大切にし、共感しながら耳を傾けようと思いました。これから更に孤立、孤独問題や引きこもり問題が増えてくると思うので、対応の仕方や話をうまく引き出せるような聞き方を身に付けていこうと思いました。